

微生物の常識が180度変わる！



私たちの身の回りには、滅菌、除菌、殺菌、抗菌をうたった生活用品があふれています。「ばい菌」は取り除き、消滅させるものだというのでしょうか。

近代の医学の歩みは、ペスト菌、コレラ菌などの病原菌微生物との戦いだったとも言えます。微生物は人間の病気を起こすやっかいものであり、医学は、それに打ち勝つことを目標にして発展してきました。

しかし近年、微生物の研究が進むにつれ、これまでとは異なる世界が見えてきました。人の指先にさえ、1億個に近い微生物が存在し、それどころか、皮膚、口腔、鼻腔、耳腔、食道、胃、腸などには100兆個を超える微生物が「常在菌」としてすみついています。私たち一人の人間をつくりあげている細胞は約37兆個。その数よりも何倍も多い微生物と私たちは共生していたのです。

興味深いのは、子宮内は基本的に無菌状態だということです。胎児は無菌のまま育ち、母胎から外界に生まれ出た瞬間に菌と出会います。そして、3歳ぐらいまでのあいだに、常在菌の主要な種類が体内に取り込まれ、すみついていきます。とくに腸内の常在菌の働きは大切で、さまざまな種類の菌が複雑に関係合って、一種の生態系のようになり、食物の消化だけでなく、体全体の免疫システムを維持し、人間の生命を支えています。

また最新の研究からは、人に害を及ぼす病原菌は、微生物全体からみると極めて少なく、おそらく、何百、何千分の1程度に過ぎないのではないかとこともわかってきました。腸内と同じように、植物の根や茎、葉などにもそれぞれ常在菌が存在し、植物と共生しています。

土の中にも数多くの微生物が存在し、有機物の分解や物質の循環に役立っています。人の腸も、植物も、土も、多種多様な微生物の働きによって絶妙のバランスが保たれているのです。

山本太郎



◎山本太郎 やまもと・たろう

長崎大学熱帯医学研究所国際保健学分野主任教授。
医学博士。専攻は国際保健学、感染症対策、医療人類学。
著書に『感染症と文明』、『抗生物質と人間』(岩波新書)
訳書に『失われてゆく、我々の内なる細菌』(みすず書房)

